ともに …

2025 年度前期号

どんなに「障がい」が重くても、地域で人々とともに豊かに生きられる社会を目ざして

★事務局　〒034-0081　青森県十和田市西十三番町５６-２２（赤平方）
★電子メール　aomorimamorukai@gmail.com
★ホームページ　http://aomori-mamorukai.sakura.ne.jp

「よろしくおねがいします そして おつかれさまでした」

青森県支部長　一戸由佳

本年度の総会を経て、谷川前支部長から重いバトンを受け取りました。１年前にはこのようなことになるとは夢にも思わず、谷川さんと一緒に仙台市での東北ブロックの会議に出席。このとき初めて、新幹線の中でじっくりお話を聴きました。谷川さんの、支部長としてまた東北ブロック長としての思いに触れ、「一緒にがんばっていきましょうね。お願いね。」と頂いた言葉を胸に、私なりに精一杯努めて参りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

◆◆◆◆◆

令和７年８月23・24日の２日間にわたり開催した東北ブロック大会・研修会は、青森県知事や八戸市長をはじめ、多くのご来賓のご臨席を賜り、また、全国守る会の安部井会長や青木理事、事務総括の山本さんにもお越しいただいて、盛大に開催することができました。

終了後のアンケートで、「たくさんの方と繋がることができた」「たくさん話せた」と、今回のテーマ〝～みんなで、語ろう・つながろう～〟が概ね実践できた２日間だったことを実感しました。一番悩んだ分科会も、「一人一人の声を聞き、みんなが思いを話すことができる場となった」など、本当に嬉しく思います。

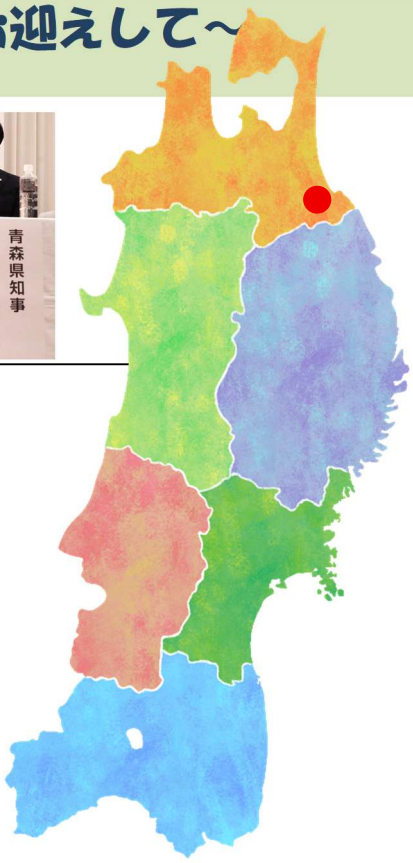
◆◆◆◆◆

開催ぎりぎりまで、「良いものをつくる」「参加者の皆さんに有意義に過ごしていただきたい」という熱意で準備をする皆さんを見ていて、谷川前支部長の築き上げたこの素晴らしい「青森県支部」の底力を感じ、とても誇らしく思いました。

今回新たに繋がった多くの東北各県支部の皆さま、全国守る会の皆さまと、情報や意見を交換し、一緒に一つ一つ前に進めて参りますので、どうぞ引き続きご理解、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

東北ブロック大会＆研修会 2025 青森大会

～安部井会長、県知事・八戸市長をお迎えして～



8年ぶりの青森大会

令和7年度の東北ブロック大会＆研修会が、8月23日（土）～24日（日）青森県八戸市のグランドサンピア八戸を会場に開催されました。青森県での東北大会は8年ぶりになります。

宮下宗一郎青森県知事や熊谷雄一八戸市長など多数の来賓をお迎えし、全国守る会の安部井聖子会長も参加する中、盛大に開催されました。

「みんなで語ろう・つながろう」の大会スローガンのもと、大いに学び交流を深めた二日間。大会の様子を、写真を中心にご紹介します。

開会式典

●歓迎の言葉

「世代を超えて語り合える、大きな人の輪となれますように」

（一戸由佳 青森県支部長）

●来賓祝辞

青森県知事と八戸市長が登壇。災害への対応や重症児（者）サービスの拡充等について熱く語りました。

●あいさつ

安部井全国守る会会長が、東北の会員に力強くエールを送りました。

●意見発表

「息子はいつも私たちに助け合うことの大切さを教えてくれます。息子も私も一度きりの人生。一歩一歩進んでいきたい。」

（青森県 竹中裕美子さん（東分会・理事）

懇親会

開会式後、ホテル内で懇親会が開かれました。大いに歓談が盛り上がり、夜まで自由交流会が続きました。

みんなで、語ろう・つながろう！

～東北の仲間が 8年ぶりに青森県に集う～

●基調講演

田中智子氏（佛教大学教授）

「高齢でも、ケアが必要でも、親も子も安心して暮らしたい。どう暮らしたいのかをみんなで話し合い、社会的なケアと暮らし方を重ねていきましょう。」

●中央情勢報告

青木建氏（（社福）全国守る会理事）

「一人で悩まず、人に話す（手離す）ことから始めましょう。会員の声が、社会の共感を得る守る会の力になります。」

分科会から

二日目は参加者全員が5人～8人程度の輪になり、それぞれの生活の様子や課題について語り合いました。

国立施設・重症児施設・在宅・母親の各部会の話し合いでは、東北の各自治体・病院・施設の間で今もサービスの状況や対応に大きな差があることが分かり、参加者から驚きの声が上がりました。また、各テーブルでは一人一人の悩みが共通の話題になり、世代を越えてつながる守る会の良さが感じられました。

心をこめて大会を準備・運営

今回の大会は、手作り名刺の交換や自由交流タイム、小グループでの意見交流と、たくさんの工夫が生かされました。

また、青森県や一般社団法人「りあん」の協力のもとで、「視線入力」の体験コーナーや「とろみ食」の試食コーナーが設置されました。

大会の二日間。青森県の会員や賛助会員のスタッフは、東北各県から参加した方々からたくさんの労いと感謝の言葉をいただきました。来年は、山形県で再び語り合い、つながりましょう。

総会報告

令和７年度年次総会・研修会は、令和７年５月18日にアピオ青森にて開催されました。

令和６年度活動報告として、各分会で独自の事業を行い活動の幅を広げたことが報告されました。中央分会では浅虫温泉のホテルで宿泊交流事業「医療的ケア児家族交流キャンプ」を実施するなど、全国守る会の支部活性化支援事業助成を４事業で活用しました。

役員改選では、長年にわたり会長を務められた谷川幸子さんに代わり、新会長に一戸由佳さんが就任したほか、新たな理事に、坂本由香子さん、葛西洋子さん、木田優子さんが選任されました。

午後の会員研修会、前半では、県障がい福祉課と県教育庁特別支援教育推進室から今年度の取組などの情報提供をいただきました。

後半では、「温故知新　～青森県守る会の仲間たちの想い～」と題して、平山富美子さんと一戸由佳さんから、守る会との出会いや想いが語られました。

新理事紹介

坂本由香子

今年度から理事を務めます坂本です。兄が青森病院に長年お世話になっており母の他界を機に参加させて頂いております。会員の交流の場にて障がい者を取り巻く制度を教えて頂き、守る会の必要性を感じましたので微力ながらお手伝いさせて頂きます。

木田優子

今年度より理事となりました賛助会員の木田です。以前、看護師として重症心身障がい児・者病棟で、現在は看護教員として学生とともに関わらせて頂いています。患者様やご家族から笑顔と元気、癒しをいただき、時には励まされてきました。これからも皆様の助けになれるよう、努めてまいります。よろしくお願いいたします。

葛西洋子

今回改めて理事になりました（実は２回目）西分会の葛西です。息子がさわらび療育福祉センターに入所しています。私は人と話すのが大好きなので、いろんな場に出向いて刺激を受けたいと思っています。これまで参加したブロック大会で県外の友人ができた事も財産です。よろしくお願いします。

青森県健康医療福祉部　障がい福祉課
社会参加推進グループマネージャー
奥田淳子　氏

昨年7月に、青森県療育福祉センター運営あり方検討会が設置されました。あすなろ療育福祉センターは昭和59年、さわらび療育福祉センターは昭和45年に建てられ、老朽化が進み、利用者の支援ニーズも変わってきていることから、センター機能と整備の方向性を検討するためのものです。昨年度は、全体会とあすなろ部会とさわらび部会を各2回開催しました。

あすなろ部会では、長寿命化改修または建替について検討します。手術機能は県病に移転し、小児科は常勤医師の確保について等検討します。医ケア児の受け入れについても小児在宅支援センターと連携していきます。

医療型短期入所は定員2名から3名に増やす予定です。あすなろ療育福祉センターの基本方針は、現在の「有床診療所併設福祉型施設」を維持しつつ、利用者の利便性向上を図っていきます。

さわらび部会では、建替の方向で弘前市内への移転を検討します。医師の確保について、弘前市内に移転すれば弘前大学からの連携も可能であると思われます。また、あすなろ療育福祉センターとさわらび療育福祉センターをオンラインでつないだ診療等を検討します。さわらび療育福祉センターの基本方針は、現在の「無床診療所併設福祉型施設」を維持しつつ、医療的ケア児については、内科医が日中いるので医療的ケア児の対応可能な範囲で受け入れていきます。

今年度は、職員や利用者との意見交換、整備費用比較調査を行い、利用者にとって使い勝手のよい施設を目指して参ります。

◆◆◆◆◆

県内の医療的ケア児は昨年度154名で、就学前や小学生の割合が高くなっています。36ヶ所の訪問看護事業所で92名の医療的ケア児の受け入れが可能です。医療型短期入所は8ヶ所ありますが、まだ充分ではありません。

医療的ケア児の受け皿を確保するための新たな開設を促進する事業では、全部の圏域に医療的ケア児を受け入れる医療型短期入所事業所を確保していきたいと考えています。人工呼吸器を装着する等症状が重い医療的ケア児については青森病院などでの受け入れができるように連携を強化します。

◆◆◆◆◆

青森県小児在宅支援センターの昨年度の相談支援の実績は60名、家族、事業所、市町村からの相談は延べ293件となっています。他にも看護師の研修、災害時個別避難計画の策定に向けた市町村合同研修会、コーディネーターフォローアップ研修等を行いました。

小児在宅支援センターでは引き続き相談支援を行います。障がい福祉課では通所、生活介護事業所にも対象を拡大した看護師の研修を行います。事業所で医療的ケア児を受け入れるために必要な、送迎車輌、備品などの購入補助ができる、医療的ケア児等受入促進事業費補助事業を始めます。

また、こどもみらい課や学校教育課と連携して医療的ケア児への支援体制を確立していきたいと考えています。こどもみらい課では医療的ケア児の保育所での受け入れを啓発するようなフォーラムや保育所への補助金の交付を行っています。

このように様々な取組を行い、医療的ケア児の在宅生活支援体制を整備していきます。

青森県教育庁学校教育課　特別支援教育推進室
指導主事　森山貴史　氏

特別支援学校と特別支援学級在籍者について、平成27年度に特別支援学級在籍者数が特別支援学校の在籍者数を上まわり、令和6年度5月現在4,138名でした。

特別支援学校の児童生徒数は横ばい状態です。小中学校特別支援学級の障がい種では、平成27年度を境に自閉症・情緒障がい学級数が知的障がい学級数を超えて増加が顕著です。

特別支援学校における医療的ケアを必要とする児童生徒は、令和6年度は92名でした。割合としては5％程です。学校看護師は、令和4年度より増員し、令和7年度は9校に27名を配置しています。令和6年度は、医療的ケアを必要とする児童生徒が在籍している小学校は10校、中学校は2校の計12校で12名になります。

令和6年度は、「学校における医療的ケア運営協議会」において、教員の気管カニューレ内の喀痰吸引の実施について検討し、実施要綱等の改訂を行いました。また、同年度に開催した医療的ケア実施校担当者情報交換会と連絡協議会では、主にヒヤリ・ハットの取組について研修や情報交換を行いました。さらに、同年度に「医療的ケア児通学支援事業検討会」を立ち上げ、実態調査や他県視察を行うなどして、通学支援の在り方について検討を重ねています。

医療的ケアに関するガイドブックとリーフレットを県教育委員会ホームページに掲載していますので、ぜひ御活用ください。

30周年を迎えるにあたって
事務局　赤平光定

青森県重症心身障害児(者)を守る会は平成8年(1996年)4月に設立し、明年30周年を迎えます。

設立の前年(平成7年)、障がい児者の生活の充実を願う親たちがつながりました。(以下、いずれも当時の名称)生活リズムセンター「ノーム」(当時岩木町)、「青森障害者ともの会コスモス」(青森市)、「翔きの家」(八戸市)など、県内各地で活動する仲間たち。また、国立病院や肢体不自由児施設に入所する子どもの親たち。さらに、県内の学校教育、行政、福祉、医療の関係者が賛助会員として加わりました。

設立時の平成8年度は、会員数「正会員76名、賛助会員51名」でのスタートでしたが、2年後の平成10年度には正会員が134名へと増加し、行政等への要望や交流セミナーなど活発な活動を展開。また、東北6県全てに守る会の支部が結成され、第2回となる東北ブロック研修会(現在の東北ブロック大会・研修会)を浅虫温泉ホテル松園を会場に開催しました。

◆◆◆◆◆

30年の歳月は長いようで、あっという間のようにも感じます。大きな通過点として、さらなる10年後に向かって歩んでいきましょう。

EyeMot フェス 2025 in 青森（むつ）

お話が難しくても
体が動かなくても

もっと伝えたい！表現したい！

一般社団法人 りあん
輪いどの会
青森県重症心身障害児（者）を守る会（北分会）

青森県むつ市から全国へ！

7月6日、青森県むつ市で、「視線入力」を使った体験型イベントが開催されました。「視線入力」の技術を誰もが気軽に体験するために開催された、全国発信の行事です。

それは本人の「作品」ですか？

重度の障害児（者）が音を出したり絵を描いたりする時、支援者がその方の手や体を動かすことがよくあります。「だって体が動かないから無理」と考えていませんか？

もし、ご本人が画面を見て自発的に「目で追う」ことができるなら、自分で作品を描いたり、気持ちを表現したり、ゲームを楽しんだりすることができるかもしれません。それが「視線入力」の技術、EyeMot（あいもっと）の世界です。

この「視線入力」の技術を、先進的に活動に取り入れて全国に発信してきたのが、「りあん」と「北分会」です。

視線入力で広がる可能性

「あっ！動いている風船を見ただけで割れたよ！」

「おもしろい！視線でこんなきれいな絵が描けるんだね！」

当日は、下北地域に住む親子だけでなく、遠方から駆けつけた家族、福祉施設の職員や学校教員、行政の関係者等が次々と「視線入力」の世界を体験していました。

視線で描いた絵（模様）を使ってアクセサリーを作るコーナーも大好評でした。視線で描いた絵やアクセサリーは、まさに「世界で一つだけ」の「作品」です。（「りあん」で購入できます。）

「視線」が伝えてくれるもの

何を見て、何を楽しみ、何をしようとしているのか、「視線」はその方の意思と可能性を、私たちに伝えてくれるかもしれません。

スマホのカメラから読めます

「ポランのひろば」
視線入力最新情報
（開発者伊藤史人さん）

「りあん」
むつ市から活動を
発信！

会長からのメッセージ

全国重症心身障害児（者）を守る会
会長　安部井　聖子

東北の皆様、私は「守る会」の会長になり2年目になりました。ぜひ、顔と名前を覚えてくださいね。

この夏は記録的な猛暑に加え、大雨のニュースが続き大変心配しております。自然災害の被害やご心配があれば、すぐに支部に連絡してください。災害支援金を早急に活用できるよう準備をいたします。

今回の東北ブロック大会では、青森県知事や八戸市長など多くのご来賓をお迎えでき、大変感謝しております。私たちの会の活動は、親だけではできません。発足当初から専門の先生方と手を取り合い、車の両輪のように活動して参りました。青森県での東北ブロック大会の開催を、きっと谷川前青森支部長も、ベッドの上で喜んでおられるはずです。

「守る会」の60年は、北浦前会長と多くの親たちによる運動の歴史です。私たちはその並々ならない努力の恩恵をいただいていることを忘れてはなりません。今年度は、福祉制度の改正や次期報酬改定の見直しの準備など、重要な会議に参加しています。この会議に、ぜひ皆様の声を届けたい。会員の切迫感が薄れてはいませんか？　子どもの生活や将来の姿を真ん中において、みんなで考えていきましょう。

〈東北ブロック大会でのあいさつから要約〉

守る会は結成60年の節目を越えました！

守る会の結成から60年

昨年度、「全国重症心身障害児（者）を守る会」は創立60周年を迎えました。

本会の結成は1964年。重い障害があるお子さんを抱えた親たちが「最も弱いものをひとりももれなく守る」などの三原則を掲げて設立しました。当時、「社会の役に立たないものに国のお金は使えない」との風潮の中、「どんなに障害が重くても真剣に生きている子の命を守ってほしい」と訴え、施設や地域の環境整備や福祉制度の充実を社会に働きかけてきました。

かけがえのない人生を豊かに

昨年9月に行われた創立60周年記念大会（東京）では、天皇皇后両陛下のご臨席のもと会の歴史や親の思いが語られました。

あいさつの中で、安部井会長は「多くの先人の親たちの筆舌に尽くしがたい活動の積み重ねにより、今日まで歴史を築いてきた。私たちは重症心身障害児・者から輝く命の尊さを教えられ、導かれてきた。これからも社会の理解・支援をいただけるよう、60周年を節目にしてさらなる努力を続けていきたい。」と御礼の言葉を述べました。

また、天皇陛下からは、「重い障害がある人たちが、施設においても、地域においても、かけがえのない人生を豊かに生きていくことができる社会が続いていくことを望みます。」とのお言葉をいただきました。